

0～3歳児の自然体験遊びについて：親子の身体接触に着目して

著者	梶浦 恭子
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	54
号	4
ページ	171-181
発行年	2018-03-31
URL	http://doi.org/10.15012/00001066

〔論文〕

0～3歳児の自然体験遊びについて

——親子の身体接触に着目して——

梶 浦 恭 子

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

戸外の地面や草地の上を散歩するなど、森の自然を体験する遊びに親子で通う乳幼児(0-3歳)は、どのような遊びの世界を展開するのだろうか。

本研究は、乳幼児が、(1)どのように自然の環境(世界)に出会っていくのか、(2)何に触れて関わり、体験し遊び始めるのかを、乳幼児の手(指)や身体の行動(行為・動作)場面の観察から行為・動作の過程を探る。

自然体験に関わる保護者である大人(乳幼児には大切な存在)と乳幼児との関わり、自然物に触れて遊ぶ乳幼児はどのような動きを表すのか、関わるのか、動きに着目して事例を作成した。事例を整理した結果、①大人に抱っこされる行為から、②大人に絡みまとわる行為、③横並びで手つなぎする動作、以上3つの自然の環境に関わる行為・動作について、本研究では言及する。

キーワード：0～3歳児，自然，環境，身体と手の動き

0-3 year old children at natural play

—— Focusing on physical contact between parents and children ——

Kyoko KAJIURA

Faculty of Health and
Nagoya Gakuin University

1. 研究の背景と目的

1-1. 研究の背景

近年、都市化や核家族化、少子化、電子メディア普及などの社会変化を背景に、子どもを取り巻く環境が、戸外遊びから室内遊びが多くなった。四季を肌で感じ、雨や風の音に耳を傾けたり、自然物（生物、無生物）と触れ合って遊ぶ直接体験の機会や、人と顔を見合わせ関わったり、身体全体を使って飛び下りる、駆ける、投げる運動遊びを思う存分にしたりといった、感覚を研ぎ澄ます生活や、身体全体を動かす遊びが減少傾向にあり、子どもの心身の成長に大きく影響を及ぼしていると考えている。

乳児は、肌で感じ成長する。人の肌の接触が快感や心を育む（傳田光洋2007）。ところが、大人の「メディア接触」は、家庭の生活環境に浸透してきており、乳幼児にもメディアの接触は免れない。小児科医田澤（2014）は、画面を眺めながらの「ながら授乳が60%」の報告で、母の眼差しが子へ注がれず、母子のコミュニケーションの源が欠けるとし、親子、家族、人間としての絆の形成の障害となると警告している。乳幼児の発達への影響については、幼ければ幼いほど、また長時間ほど、「可塑性のある脳に負の影響を与え続ける」。その結果は、劣悪な養育環境から生まれる「後天性の発達障害類似の問題を引き起こすように思う」と述べ、外来の小児患者診断から得られた現状の深刻さが伝わってくる。

米国小児科学会では、1999年に2歳以下の子どもメディア接触禁止の提言を発表しており、遅れて5年後の2004年に小児科医中島（2014）が、日本小児科医会、日本小児科学会において同様に発表している。

田澤（2015）は、乳幼児に「興奮ではなく

感動を」と、テレビやゲーム世界を離れて、現実世界の中で生き、人間として大切な前頭葉が動く、家族や地域社会で子どもと一緒に遊ぶプログラム作成や、大人と子どもが触れあう「遊び歌」に親しむことや、物語を大人から聞いたりする等感動体験を豊かにする方法を提案している。

河合（1997）は、「嬰兒が母の胸に抱かれ、乳房をまさぐり心が安らぐ」と同様、「森林の緑の中では心が休まり、落ち着いた気分になる」、「緑の中でこそはじめて安心感に浸れる」のは、「先祖から受けついできた系統発生的な適応感覚による」と言う。河合は「進化史を通じて人類の存在の根本を形成している諸性質を内なる自然」と名づけ、その「内なる自然と外の自然の響応がいのちの流れ」であるとし、そして、子どもの内なる自然の一つである「群れて遊ぶ」、その遊びから「こけ方やけんかのしかた、飛び下り方など、子どもとして生きていく基本的行動を身につけていくものなのだ」と言う。河合は、子どもには、霊長類の本来の姿を呼び覚まし、外の自然と対応し調整しながら生きる行動の必要を訴えた。ならば、河合が言う、群れて遊ぶ動きや姿が表現できる空間、時間、仲間が成立する保育環境はどこで実現できるか。筆者が継続的に研究実践する森という自然環境である、子ども自らの遊びや生活をつくりだそうとする体験においてで、成しえる保育環境の一つではないかと考えている。

汐見（2012）は、人間の「内なる自然」のきっかけが外的な自然で、内的な自然の創造を活性化するのは、外の自然と具体的にどう出会うかだと言う。戸外の自然界には、多様に物がある。その対象物の柔らかさや堅さや凹凸など、身体でもとりわけ手や指は感覚受容器官で、いろいろな自然物の接触面に触れる。すると、乳幼児

はその子なりに内なる自然の本質を感じて受容し、独自の身体全体の動きをしながら手指の行為によって、多様な行動を見せていくと考えている。

つまり、乳幼児は、周囲の出来事や他者とのやりとりのさまざまな感動体験を、バーチャルの世界や人工物ではなく、直に人や物の質感や本質を体感することによって得ていく。そうした直接体験による知の積み重ねが、乳幼児の次にしたい遊びの力となっていくと考えている。

1-2. 研究の経緯

森の自然体験遊びでは、乳幼児は手に何を持ち、触れ、心身をどのように動かし発達を助長しているのだろうか。梶浦・今村(2015)の資料による報告では、多くの幼児(3-6歳)が、木の枝や石や砂、粘土、草花、木の実などの自然物に触れている。その中でも、筆者が訪問する森のようちえんは、多様な樹木が生い茂り、木の枝が地面のあちらこちらに落ちているため幼児は男女問わず、見つけた枝を、自由に手にし、気に入れば持ち続けるといった姿が観察された。

点する枝を手に入れた幼児は、遊びの拠点まで持ち運び、自由に振り動かし歩いたり、自分なりに枝と向き合い、関わって遊ぶ2歳児Sy児の一幼児の身体や手の行為の多様な身体性の動きを、具体的に記録し資料を作成した。幼児の行動記録から、事例を分析し、幼児の内面理解の手がかりに、3つの仮説を立てた。

幼児は、触覚器官である手に枝を持ち、枝に親しみ「受容」し、枝の特徴を「探索」する「受容探索」説。幼児は、持った枝にふさわしい動きを見せ、遊びが始まり、動きから生まれる発想を幼児が形にしたり、意味づけて遊びを展開したりする「遊び発祥創造」説。枝は、心身の

動きを生み、幼児の思いに柔軟に応じる「玩具」として使われ、仲間と関わり社会性を育む「玩具社会」説である。

枝以外の自然の対象物については今後の課題としている。幼児の教育的な可能性が見出せるであろう幼児と自然の関係性を行為・行動から継続して追求したい。

1-3. 研究の目的

戸外の土の上を散歩するなど、森の自然を体験する遊びに親子で通う乳幼児(0-3歳)は、どのような遊びの世界を展開するのだろうか。

乳幼児期は、見るものすべてが新鮮で、気づけば周囲を見回し、聞く、触る、動き回るといった、指先から身体全体の感覚を使って直接体験し、経験を重ねていくと考えている。

幼稚園教育要領(文部科学省(2017)フレーベル館)の総則第1章 第2には、幼稚園教育において「育みたい資質・能力」の柱の一つに、1(1)「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする」「知識や技能の基礎」を育む時期とある。「豊かな体験」については、乳幼児があたりまえにある日常生活や遊びとして、木々の間を散歩することや、四季折々にめぐる草花や動く生き物に目を向ける等、毎日のように継続して自然を楽しむことだと考えている。また、他者(自分以外の関わるすべての人)と遊びや生活をつくりだすことも豊かな体験につながる。さまざまな出来事が起こり出会う物や人、内容が立ちあがった時に、人として身につけたい感覚をその時々を考えたり、話し合ったり、伝えたりして磨き、内なる自身の世界を少しでも広げ、感じたり、気付いたりするなどの「知識及び技能の基礎」を遊びの中で培っていく幼児期になればと捉えている。

では、探索心が旺盛な0, 1, 2, 3歳児は、森の自然環境にある自然やそこで起こる出来事に、どう出会い、楽しみ、遊ぶのだろうか。手を伸ばし、関わり、手や身体を使って、どのような行為（意識した行動全体の様子）や動作（身体の部分である手話動作）をするのだろうか、その様子を参与観察したい。

「親子で一緒に自然を楽しみませんか」と周囲の施設等から地域社会に投げかけ、「森のようちえん」活動に賛同し通い始めた乳幼児を持つ家族を対象にした。本研究では、乳幼児が、

(1) どのように自然の環境（世界）に出会っていくのか。

(2) 何に触れて、関わり、遊び始めるのか、森の自然の中で起こる出来事に関わる行動（行為や動作）場面の観察から、手（指）や身体の利用・動作の内容を切り取り、触れて関わり体験をし始めるのか、その過程を探っていく。

2. 研究方法

(1) 対象園は、近畿圏にある「S森のようちえん」。対象児は、親子で行動する未就園児10組程度を毎月募る。保育スタッフ4名（筆者含む）も親子や家族参加である。

(2) 観察日は、2016年10月～2017年12月の月1回の第三日曜日。10時～12時30分。

(3) 方法は、乳幼児が触れる自然物と手の行為・動作、出会う出来事を随時カメラ撮影する。選択した写真と直接体験の情報を記録する。探る・みる手、つなぐ手、物や道具を操作する手、伝える手、支える手（矢崎潔、小森健司、田口真哉2017）の5つの手の機能の役割区分を参考に、乳幼児が表す独自の手や身体の利用・動作、行為を記録し考察する。

3. 結果

本論では特に、乳幼児が、森の自然環境の中、さまざまな出来事に心が動き、自分から自然物に直接触れて遊ぶ過程を捉え、自然と関わり始める乳幼児の行為や動作場面の観察記録から分析する。

表-1 月別参加人数とはじめての体験者数

	参加者	はじめての体験
10月	11人	8人
11月	7人	1人
12月	6人	2人

10月から12月の3カ月、参加総数は親子14組で、乳幼児の人数は24人。保育スタッフの子ら以外は、はじめての自然体験活動であった。初経験者人数は、表-1に示すように、10月11人中のうち8人、11月は7人中1人、12月は6人中2人であった。

本研究では、自然物と関わる乳幼児独自の動作、特徴的な行為の場面を事例として抽出しようと考えて取り組んでいった。

観察を進めていく中で、乳幼児の様子は、森の自然という緑豊かな環境と無理なくスムーズに向き合うであろうと考えていた。だが、それ以前の乳幼児自身の心情面を置き去りにしていたという反省点が見られた。

森に来ていること、その現時点の乳幼児の心情には、「S森のようちえん」という集団社会という、つまり集合場所や人の集まる気配、声の大きさや言葉のざわめく環境の空間など、見知らぬ人の集まる空間は、日常の家族と過ごす出来事とは勝手が違うのであった。その状況について、親子双方に戸惑いはないかを、事前に探る余地もなく自然体験の活動（遊び）実践の

10月1回を進めるにいった。

乳幼児の非日常の不安感が、身近にいる「大切な大人」（以降は「大人」「他者」と表現）への依存度を高めた行為や動作になっていったと思える。

親や家族と一緒に行動することはこれまであったにしても、新たな場所、空間、人の数、仲間集団は、乳幼児には、毎日が日常とは異なる。ゆえに、目の前の自然に興味・関心を持つことは、すぐにできることではなく、繰り返され、しだいに慣れ親しまれていく物事であると、考えさせられた。

抱っここの行為は、乳幼児にとって一見すると、受け身的な様子に見えるが、抱っこから見える森の風景を大人と同位置で、胸の鼓動を聞きながら外界を覗かせてほしいと、子が要求しているという捉え方もできる。これは、抱っこされながら気になる自然物に、いつの間にか手を伸ばすといった乳幼児の能動的な様子が見られたところからの推察である。

以上の内容から、乳幼児にとって身体的、情緒的な発達において大人の存在は、重要な意味があると考えられる。

森の世界にある自然の環境である、人(大人、他者)、自然の環境に触れて遊ぶ出来事として、大人との身体接触行為、自然物に手を伸ばす行為(意識した反応)、自然体験を始める動作(四肢や身体全体の動き)の、乳幼児の行為・動作を順に並べて、12事例の収集ができた。

それは、自然、乳幼児の関係性、大人(他者)の要素を加え、3つの視点に立った事例を、10月～12月の3日間の写真記録(1日70枚程度)から、取り上げた事例である。

自然物に触れて遊ぶ乳幼児の身体や手の表現行為、動作を整理した結果、以下の6つのカテゴリーに分けることができた。

親子一緒に自然を体験する散歩や遊びにおいて、

乳幼児は、

① 大人に抱っこされる行為

大人に包まれることで緊張をやわらげ、安心を得て自分を確立するための基礎づくりの過程と考えられる。

② 絡みまわり巻きつく行為

この行為は、腰や足に絡み、身体を委ねたりするが、足を地につけている態勢のため、視界は間近に広がる。そのため、絡む接触の持続時間はそれほどないと思える。①に類し、大人を砦にして外界を覗き、自分ができるようなことには行動が起こせるように、出番を待ち伺っている基盤固めの過程と考えられる。

③ 横並びで手つなぎする動作

④ 前向きで(向かい合い)見せて伝える動作

⑤ 横並びで操作(したり見せたり)しながら伝える動作

⑥ 自分自身で黙々と探究する、操作する動作という行為、動作、①～⑥の分類ができた。

④から⑥の事例は、乳幼児と他者(大人)の身体には、それほど接近した感覚はなく、少しずつではあるが他者(大人)と距離を置いていた。

自然の環境である対象物と乳幼児との新たな出会いは、その子の関心や興味の度合いや、気づき、理解しようとする内容が、他者である人や物と出会う瞬間に「感じたり、気づいたり、分かたり(幼稚園教育要領2017)」の繰り返しが行われ、自分自身の認識の改善(自然体験活動研究会2011)がなされると考えている。

本論では①②③の乳幼児の身体と手指の行為、動作について、自然、他者との関係性を中心にした行為、動作の3事例を分析した。なお

④から⑥の事例研究は、別稿に譲りたい。

R児は素早く^③大人の腕から自分ですり抜け、下りていった。

3-1. 事例検討

【① 大人に抱っこされる行為から】

〈背景〉10月16日の初回、森に集まった乳幼児は、手のひらや指を見開いたようにして肩部を掴む、そうした強い気持ちを込めた抱っこ行為を大人に求めたり、親の腹部にまわり身体を密着する光景が見られたりし、泣き声も少々あり、ざわめいた雰囲気での活動が始められた。保育者は自然体験をする中、親子の触れ合いを楽しむ気持ちが持てるようにと考え、また興味が森にが向けられるようにとの思いで、少し歩くと、ガマズミの木がある森の入り口の方角を、指でさし示した。大人自身の表情に期待感や関心が持てた気がした。

四季を通じて森には色、音、動植物などの折々の移り変わりを見たり聞いたりができること、今日は、人が食べられる木の実が、味わえることを話す。親子で一緒に濃淡の赤色の変化を見て、味比べができると語り、親子の気持ちの動きを誘うようにした。

事例A：抱っこのR児

R児（0歳児）は、R児を^①抱っこする大人（母親）から、森の中にある木の実のこと、その実は味わえるという、今は見えないけれど森を歩けば発見できる旬の四季の味覚情報を、優しく分かる言葉でR児に伝えてもらっていた。

R児は、森の方角へゆっくりとした大人の足取りによって^②抱かれたまま進む。

R児は、赤く熟した木の実を、大人の目の高さから自分の目で捉える。すると、ガマズミの実を認知した瞬間のこと、ぴったり接触していたはずの大人の身体から、

《考察》蔓が絡まるように大人の身体に、R児は腕や手指は抜け、自分の身体の丸ごと委ねる。そしてR児は、強く大人の身体を自分の方に引き寄せる。この抜ける手指は、不安で怖いといった気持ちを伝える手と大抵の大人が理解し、養護する気持ちが得られるところである。では、手や腕による強い接触行為である抱っこを求める乳幼児の手、①から②、③という子の動きについて、どのような読み取りができるか。

集合場所で活動開始早々、R児は何度もこの場所に来ていたとしても、はじめての森の空間認識になる。なぜなら同じ場所であっても、知らない人や物（リュック、動物絵柄のシート等）が置かれたり囲まれたりした時、いつもとは違うと認識するからである。その場の時間と空間にある物や事象、所属する人から生じる気配は、その時々の世界が立ち上がり新たな自己に出会うということである。従って、大人は、外の変化に気づき内なる自然の認識を改善しようとする子の、不安な気持ちを抱っこ行為として表す乳幼児の気持ちに応じる姿勢を常に持ち合わせていたい。

事例Aの①の抱っこは、大人の胸という安心できる居場所を求め、子は包まれている。②の抱かれたままの子はガマズミの木とその実を見つける目的を持って、進行したR児は大人に抱かれて肌感覚で触れ合いつながり暖められ、歩幅のテンポでリズムカルに身体ごとの揺れを感じる。心地良さを末端の手においても同様に子は感じていると推察する。身体は大人に密着し、一体になっているため、外の景色は大人と同位置で見られ、同じ方角に目を向け落ちて自然を見ることもできる。抱っこ行為の安心と、

持続による抱っこ揺れ行動の心地良さは、心身の満足感と安定感をもたらしている。R児の身体と手の同調行為からも理解できる。

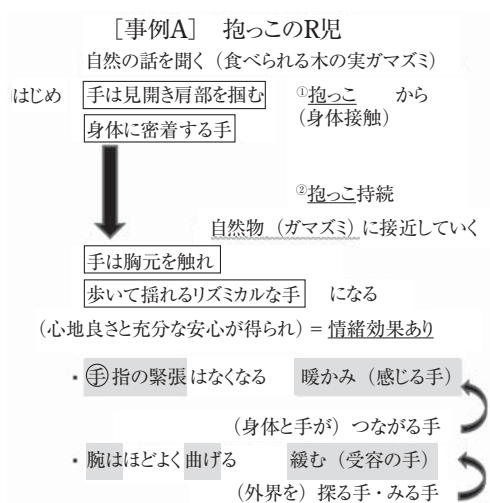


図1 手・身体の行為・行動(分析)
 ※なみ線はR児の手に触れる対象物

②抱かれたままの抱っこ行為は、図1に示すように安心で安全域の大人の胸元から、R児は外界を目の前に眺められるところまで接近ができ、抱っこ持続行為による効果がみえてきた。

赤い実を、抱っこされた位置から視覚に捉えたR児は、抱かれたまま森へ進む流れの過程において②抱かれたままの抱っこ持続行為で、R児の不安は取り除かれていったと推測できる。情緒は安定し調整できたと考えられる。よって、周囲の外的な自然の環境はすでにR児の目の前に広がったといえよう。R児は、手を伸ばせば、気に入る自然物に触れることができ、外の自然に自身の内なる自然が気づけば響き合える空間にR児は近づくことができたと考えられる。

R児は、大人の胸を、「③自分から下りて」いき、自然物に触れることができた。とりわけ、赤褐色系の実のガmazミは、多様な緑色系の葉

を背景にすると、色彩的にも目を引く。子らがキイチゴを探し、むさぼるよう口にするのと同様に、大人も自然を楽しむように小粒のガmazミの実を探す。笑顔や歓声が上がり賑わう。その最中、R児の口元に小粒の実が大人の誰からともなく近づけられるが、R児は身をのりだし吸い寄る。

一口ずつの小粒サイズの実は甘みがあり、R児は実を受容し一体化したように溶け合っている感覚である。

また、R児は、目的とする木の実に指2点つまみで採り、3点つまみで実を動かし、手のひらにのせる。自由に手指で触れている。とりわけ、赤褐色系の実は、多様な緑色系の葉を背景にすると色彩的にも目を引く。ガmazミの実の高い位置なので、枝を下げるのは、大人によるところではあったが。

R児にとって、森の自然という環境は、大人に抱っこされる行為を体験したその経験からは、安心かも、面白いかも、また次に何かいい発見があるかもしれないといった自然に対する興味、関心を持つ期待感を導いていったと考えられる。

【② 足を絡みまとわる瞬間行為から】

〈背景〉12月11日、親子で一緒に冬イチゴの収穫を終えたSy児(3歳児)は、辺りを見て、落ち葉遊びを始める女兒の動きに交じり、馴染んで楽しんでいる様子である。落ち葉遊びの周りを大人は囲んで視線は子どもに向けられている。Sy児は遊びから1人、抜け出た。

事例B: Sy児の①両手は大人(母親)の足近くに、身体全体を傾けて寄りかかり、②自分の足を絡める。その日は自然体験初回であるSy児は、カブトムシの幼虫が眠る落ち葉の堆肥場で、葉を舞い上げる落

ち葉遊びを女兒ら3人と5分間ほど続けた後、葉っぱが舞う賑やかな風景から、Sy児は大人側に抜け出て来た。一瞬、遊びを客観視する形になる。Sy児が、大人近くに寄り、絡むしぐさをする写真(1)の様子



写真(1)

は、枯れ葉の遊びがすぐ目の前で展開されている最中のことで、1分少々のおぼろげな時間であった。大人と接触する持続はそれほどなかった。

《考察》冬イチゴの収穫を終え、味覚を楽しんだ次には、何をしようかと思う間もなく、Sy児のすぐ目の前には落ち葉が舞い、面白楽しむ手足の動きと声、葉が重なり落ち踊る音も聞こえ、女兒3人の葉っぱの遊びに、Sy児は自然に身体が、枯れ葉の山にもぐり込むように参加したようであった。

途中で母と目が合ったのであろうか、遊びから抜け出た要因の言及はできないが、落ち葉舞う遊びから抜けた瞬間、母親の足に身体ごと寄りかかり自分の足を絡める。

森という自然の環境と、つい先ほど出会った女兒3人との堆肥場の様子を経て、Sy児はどんな心情が立ち現れ、大人(母親)にもたれ、身体接触をわずかだが求める行為を表したのであろうか。足の絡める行為は一瞬の出来事であったが、再びその周囲の賑やかな雰囲気、枯れ葉を舞い上げて落ちる葉を面白がる目の前の女兒ら3人の遊びに目が向けられ、Sy児は大人との接触時間は最小限にし、遊びの仲間に入っていた。そのことは、安心して安全な基地的存在である大人に受容され、自律の階段を自分の力で

一歩上ることができた場面と推測する。

また、現実の自分と子どもの想像の世界を行ったり来たりして、「自己を見出す反復でもある。(矢野智司2005)」と思える。仲間(他者)に入って遊ぶことができ、少し大きくなった自分を、大人の足に絡まりどうだったかなと揺らしながら自己の動きの判断を自分自身に問うたり他者に確かめたりしたいのであろう。その心身の振幅は、無心に遊ぶ喜びを想像する力や、自分でも遊びをつくりだす創造性の力を育み、自分の気持ちを確立する基盤づくりをしていると考える。

【③ 横並びで手つなぎする動作から】

《背景》12月11日、Si児(2歳児)は初の自然体験であった。冬イチゴの発見ができるスポット箇所や、甘酸っぱさの味覚を体験できる楽しみの一つを、保育者は大人にも期待が持てるよう、知らせる。大人それぞれの伝え方で子に伝言する。子も大人もそれぞれが森へ入る期待や目的が持て、探検でき冒険心が芽える気持ちを持ち合わせ、気持ちを少し高めて出かける。

事例C: 身体を森へ向け、草の上を横並びで歩き出す親子。小走りする子もいて、手つなぎはしたり、しなかったり。(略)

セミの抜け殻をS児(2歳児)は手に入れた。この時期には見られない存在のため、大人も不思議だねと横並びの位置(手つなぎはない)で、やりとりをする。「珍しい物だよ、これ」と、周辺に届くくらい言葉が行き交い活気づく。壊れそうなセミの殻、写真(2)では、S児は2点つまみの把握動作、写真(3)では、3点つまみの把握動作で、両手で殻の全体を観察



写真(2)



写真(3)



写真(4)

する目で見、殻の内容を具体的に探る手の動きである。

珍しい物を見たい、知りたい、手に触れたい、その気持ちを駆り立てるS児と大人(母親)の雰囲気を感じ、Si児(2歳児)は覗ようとする。横並びで手つなぎする大人(父親)より、一步前に踏み出し、大人を引っ張る形の手つなぎ動作が写真(4)に見られた。

《考察》冬イチゴの実の、形や色、味はどんな甘さであるのか等と、話す親子は、横並びで歩いたり手つなぎしたりする様子がある。大人は、乳幼児に歩調を合わせ、歩く身体は軽くリズム的であったり、そうかと思うと「(ボクは)手はつながない」と言わんばかりに手を引っ込めるしぐさがあったりして、自然を体験する子らの朝の出だしは、いろいろな子の動きがあって、気持ちの表しがあり、その親子の背負っている物事が伝わってくる。

S児とSi児の事例について、セミの抜け殻を見つけたS児は、指先で持つ殻の背中の界面はつつつとして、さらに光っている。セミの殻の足先はとがっていて、指の内側の皮膚にひっかかる。

一方、Si児の身体の立ち位置は、大人と手つなぎをしたその大人の一步前に出た立ち位置で、いつでも大人に戻れる姿勢とも見て取れるし、さらに大人とS児とのほぼ中間点である。

Si児には、S児が手に持つ対象物への興味が、高いレベルであることがこの立ち位置と写真(4)にあるように顔の向きや表情でわかる。顔は斜めではあるが、S児の手の先にある殻という対象物にほぼ向けられ、殻と殻をもつS児に関心を示しているように見てとれる。

子と大人の手と手がつながり、その界面が心の安定剤として拠り所となって、外の自然にある興味を持つ対象物を探索する行為、つまり体験する遊び(学び)を展開するのに必要な核となる環境(人と物)見つけがいよいよSi児に始まったと言える。

また、Si児が大人の手を引っ張る強さ加減は、興味を持つその気持ちの度合いを表すと思える。さらに、大人とつながっていないと安心が保てないという微妙に不安な気持ちの表れがSi児の手つなぎ動作から見て取れる。

手つなぎにおける引っ張り加減、顔や身体に向く角度、立ち位置に注目する意味があると気づくことができた。

4. 総合考察

本研究では、乳幼児が自然とどう出会っていくのか、何に触れて、関わり、体験し遊び始めるのか、遊びを生みだそうとするのか、その過程を探るために、自然の中で散歩を親子で楽しむ行為や動作から、分析を行った。

大人に抱っこを求める行為の事例は、初回10月の活動内での出来事を取り出し分析した。森という広い自然環境の中に出かけながら、乳幼児が大人の身体に接触する抱っこの行為は、なぜそうするのか、疑問に思い、大人は子にどう応じたらいいのかと困り顔になる場面や、仕方がないと受け入れる場面を見かけてきた。

このように抱っこの接触行為は、乳幼児の気

持ちを抜きにして大人には、消極的で幼く弱々しい行為と、否定されがちである。だが汐見(2017)が、「子どもにとって未知のものは興味の対象ですが、不安の対象でもあります。不安を軽減し、興味を広げてくれる存在者がいると、能動的な意欲へとつながっていくのです」と言うとおり、密着した接触行為を大人は、人見知りや大切な人との分離不安なのねと、子を受容し理解したい。事例Aの抱っこは、肌に触れながら歩く行為で共に揺れ、それだけでも子の心は満たされる。大人は子に十分に応じていくと、不安や緊張はしだいにほぐされていき、興味のある外の自然に気づき、素早く、目的の赤い実を手を伸ばし、自ら動き出すという姿が見られた。

大人が抱っこを持続するには子の重さの丸ごとを支えるという大変さはある。だが、子は抱っこでそのまま揺れる動きの心地良さが味わえ、心身の満足と安心である安定感をもたらされ自発的な行動になっていったことは事例から確かめられた。大人に抱っこされる子の動きには変化があり、R児の手が、歩く調子で一心同体の身体が揺れ、醸し出すリズムカルな同調行動から、安心と安定感の情緒の変化が理解できる。

身を絡めて大人に寄りかかる行為場面からは、大人に触れ、ボクはここまででき、大きくなろうと努力しているよと、Sy児は自分の気持ちを言葉ではなく、意味のあるくねらせた動きで近くに寄り、大人に表し発信している姿であると考察する。Sy児は大人の体温を実際に確かめ、感じ、励ましを自分で獲得しているかとしていると思える。

事例A, B, Cから、乳幼児と自然、大人の関係性を、身体接触の行為、動作場面から以下の内容が示唆された。

- 乳幼児の子育てを外の自然に期待する大人が存在が見え、大人も子らと一緒に自然に心も身体も向け、溶け込むように楽しんでいる。自然体験に参加する大人の意欲的な意識が、子にも自然に囲まれる安心感や期待感となり、自然の出会いをスムーズにし、豊かに展開している。

- 身近にある自然を使って面白おかしく遊ぶ仲間(他者)存在の動向は、新たな遊びの出会いと想像の世界になり、乳幼児の関心を引いている。

- 親子の身体接触や大人の手を子が引く力の程度や、身体が向く角度に子の思いがあり、子の身体の動きを気持ちの動きでもあると真摯に受け取る大人を受容する姿勢は、乳幼児の遊びの原動力になりうる。

他方、大人と乳幼児が接触する距離を少し置いた動作として、大人の身体を砦に安全地帯として、自然の環境と大人を行ったり来たりしながら対面に向かい合い、自然物を乳幼児が大人に見せて伝え、自然の環境に再び戻る乳幼児の動作があったり、横並びで操作しながら伝える動作から仲間(他者)に向かいかわる姿があったり、自分自身で黙々と探究したり操作する等活発な動作が見られた。その、大人と乳幼児が少し距離を置く形態がどのように変容するのかを明らかにするために、今後、継続して事例を検討していきたい。

謝辞

本研究は、「S森のようちえん」の保育者ならびに子どもたちのご協力があって、はじめになしえるものであります。この場をお借りし、深く感謝の意を表します。

引用文献

- 傳田光洋（2007）第三の脳. 朝日出版社. 170-174
- 田澤雄作（2014）子どもの過剰な映像メディアとの接触による発達への影響. 小児科臨床. Vol. 67増刊号, 265-271
- 中島匡博（2014）チャイルドヘルス Vol. 17 No. 8. 529-532
- 田澤雄作（2015）メディアにむしばまれる子どもたち. 教文館. 174-183
- 河合雅雄（1997）子どもと自然. 小学館. 31
- 汐見稔幸（2012）子どもたちのセンス・オブ・ワンダー：マイクロコスモスを形成する自然体験. 美育文化特集
- 梶浦恭子・今村光章（2015）「森のようちえん」の幼児が触れる自然物に関する実証的研究. 環境教育 Vol. 25. No. 1
- 梶浦恭子・今村光章（2015）なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか. 環境教育 Vol. 24. No. 3
- 矢崎潔, 小森健司, 田口真哉. (2017)手の運動を学ぶ一手の役割と手の機能解剖との関係から運動を紐解き, 臨床に活かす. 三輪書店. 6-13
- 文部科学省（2017）幼稚園教育要領. フレーベル館
- 小森伸一（2011）野外教育の理論と実践. 杏林書院. 3-6
- 矢野智司（2005）子どもたちの想像力を育む：子どもの遊び体験における創造的瞬間 第3印. 71
- 汐見稔幸2017. これからの幼児教育. ベネッセ教育総合研究所. 4